

私の専門である電力分野では、太陽光・風力・廃棄物による発電や燃料電池が実用化されていますが、太陽光発電のコストは現行の2～3倍。私が携った風力発電もまだ若干コストは高いのですが、今後の償却で採算が合うことを折り込んで三重県で増設計画を立てています。廃棄物発電・燃料電池のコストは1.1～1.5倍ですが、廃棄物の加工や電池の保守に労力を要します。

もし、太陽光や風力で原子力発電所1基分を賄おうとすると、太陽光では愛知県全世界の4分の3、風力は浜名湖の3倍の面積が必要です。このようなことから全世界では数多くの原子力発電所の建設が進められています。なお、太陽光発電の国別導入量は、2003年の段階で日本が世界の48%を占めていますが、今年辺りは2位のドイツが抜くと予想されます。風力については日本は2%で、1位はドイツの23%。アメリカ、スペイン、デンマークが続きます。特にアメリカは大変熱心に取り組んでおり、既にドイツと順位が逆転していると言われます。

以上、色々申し上げましたが、今回のサミット当番国である我々日本人が率先して意識を高め、地球温暖化防止の礎としたいと思います。

○卓話（紹介者：長谷川道春プログラム委員長）

「人生に生かす易経」

易経研究家

竹村亜希子さん



世界最古の書物と言われる『易経』の「易」には、変易・不易・易簡という3つの意味があります。世の中は全て刻々と変化し(変易)、変化には一定の法則性がある(不易)。それは大変明解で、

色々な面で応用できる(易簡)という意味です。また、周囲の環境も含めた「時」を变化の最も重要なものと位置づけ、変化の過程を事細かに記すと共に、物事が変化する前に必ず起きる兆しについて書かれています。古い専門書と思われる『易経』ですが、実は時と兆しの専門書であり、むしろ「君子占わず」と言う立場を取っています。『易経』をよく読み、物事を3つの易に照らし合わせて考えれば、自ずと出処進退が判断できるという訳です。よくよく読むと非常に面白い書物で、今日は中でも一番面白い、冒頭にある龍の話「乾為天」をしたいと思えます。

『易経』は古来、帝王学の本ともされてきました。その理由となったのがこの話です。龍はめでたいもの、リーダーを象徴する想像上の生き物で、周囲に雲を呼び、雨を降らせる点が最も特筆すべき能力とされています。これを人間界に引き写せば、リーダーは、世の中を循環させ、恵みをもたらす役割を持つこととなります。

大変力強く、偉大な龍でも、実力が伴わなかったり、気が満ちていないかったりして、思うようにならない、恵まれない場面があります。『易経』ではそうした状態の龍を「潜龍」と言います。どんなに立派な種でも、冬の氷の上に蒔いたら実ならないどころか腐ってしまう。だから潜龍の時は、春の訪れに備え、しっかりとした志を打ち立てることが大事だと説いています。

志を立てた龍は、色々努力し、基礎力や応用力をつけ、悠々と大空を飛び「飛龍」になる時を待ちます。飛龍になるのに必ず身につけねばならないのが、見えないものを見る力・聞こえないものを聞く力です。と云っても超能力の類ではありません。たとえば風。目に見えませんが、風があることは分かります。同じように、推理すれば分かるものの動き・相手の心・力関係などを見る目を養えということですね。聞く方も、かすかな騒ぎや世論・言葉の裏にある真意等を聞き取る力が必要だということです。

こうして力をつけ、時機を得た龍は、飛龍となって大空を駆け回ります。ポンとボタンを押せば機械全体が動き出すように、何をやってもうまくいき、良い方向へと循環していきます。ジグソーパズルのパーツが勝手に飛び込んできて所定の場所に収まるような、不思議なことが次々と起こるのが飛龍の時ですが、実はこの時こそ、気をつけねばならない時はありません。

三日月が満月になり、新月になるように、上り詰めた龍は下るしかなく、これを「亢龍」と言います。亢龍は二通りあります。飛龍の時は実力以上の力が発揮されるものですが、その全てを己の力と錯覚し、驕り高ぶった龍は周りの雲を置き去りにしてどんどん上へ上り詰め、龍単体になったある時、突然失墜します。もう1つは飛龍の時の業績を無にせず、悠々と勇退して地に戻るあり方で、それには飛龍になつたすぐ後継者を育てることだと書いてあります。

龍は陰陽の陽で、飛龍はその陽が最も強い時期です。自ら意識して陰を生じなければ陽だけが上り詰めることになる。人を育てる、人の話を聞く、ものを見る、そして奉仕することは全て陰の力で、上手くいっている時程、嫌なことを言ってくれる人を身近に置き、自らの引き際を考えることが必要です。それを象徴する言葉が「利見大人」。最強の存在である飛龍にとっての大人とは誰を指すか。飛龍以外の全ての人・全ての事柄で、周囲の物事を謙虚に受け止め、自らの中に陰を生じさせることによって、雲と一体化し、世の中に恵みの雨を降らせながら、ゆったりと下っていく時機を待つことが理想的だと『易経』は語っており、何千年の時を経た今でも変わらない真理ではないでしょうか。

(担当 小出美孝クラブ会報委員)